

研究論文

水から見る晋水流域における産業と民間信仰の変遷

行 龍*・祁 建民†

I. はじめに

水は人間社会にとって最も不可欠の要素の一つであり、そして「水が人類の生活にとって必要なことはホモ・サピエンスが誕生してから変わらない」。特に中国内陸部にある山西省にとって、水は死活にかかわることである。山西省の平均降雨量は500ミリメートル前後であるが、極端な年には200ミリメートル足らずという状態で、旱害が頻発した。水の開発、使用及び管理は、人間社会の環境、産業構造、社会秩序及び宗教信仰と緊密に関わっている。

水と人間との関わりに関する水利史研究は、中国の場合には、『史記・河渠書』が水利通史の始まりであり²、歴代の正史の中でも「河渠誌」があった。清代には『行水金鑑』が、民国時期にも歴代の水利史が刊行され³、現代中国でも大規模な水利通史が編纂されてきた⁴。このような水利通史は殆ど人間が水を最大限に利用するために、水利開発と管理を中心としていた。近年、水と人間社会との関わる水利社会史研究が盛んになったが⁵、社会史研究における「碎片化」(こまごました)と同じように個別の「水争」や水利慣行などを中心として取り上げていた。日本の場合には、戦前期の水利史の研究には岡崎丈夫、池田静夫の研究があげられる⁶。ウィットフォーゲルの「水の理論」は、

水利と社会政治制度との関係を提起したが、その後の中国水利に関する実証的研究より論理的論争にとどまった。戦後になると豊島静英が発表した水利共同体に関する実証的研究など⁷、幾つかの成果が挙げられた⁸。特に森田明をはじめの「中国水利史研究会」は多数の業績を発表した⁹。近年、山西地域の水利の研究を中心とする森田明と井黒忍の研究が注目された¹⁰。しかし、中国さらに日本でも同じように、今までの研究は、「水利」に関しては、大自然から水を利用して、「富」を取る方法、及びそれによって形成した法律・慣行を中心として研究されてきた。従って、人間の「水利」活動による水資源に対する破壊については殆ど検討しなかったと言わざるを得ない。いうまでもなく水資源の破壊は環境問題であり、水をめぐる環境の研究は長期間の変遷過程を考察することが必要である。

そこで、本稿は山西省中部の晋水流域における水資源、人口、環境の三者の相互関係を千年単位に広げ、この地域における環境と産業構造及び宗教信仰の相互影響の歴史を、その長期的時間的空間の中で考察してみる。

晋水流域の水源は晋祠にある難老、魚沼、善利という三つの泉から湧き出る水であり、南東に流れ、最後に汾河に注いでいる。清代の流域の範囲は現在の太原市南西部の金勝、晋祠、姚

*中国山西大学中国社会史研究センター教授

†長崎県立大学国際情報学部教授

村三鎮と晋源、羅城、義井三街道弁事処を含んでいる。

Ⅱ．晋水と晋水流域における産業の変遷

晋水の開発はかなり昔から始まった。当初は戦争のために掘られた水路が晋水の発端である。紀元前453年(周貞定王一六年)晋国の貴族智伯が韓氏・魏氏と連合し、趙氏の晋陽城を奪い取ろうとしたが、3か月間攻め取れなかった。智伯が掘割を掘って晋水を引き込んで、晋陽を流し込んだ。趙氏が頑強に抵抗した後、趙氏が智伯と韓氏・魏氏との関係を離間して、韓氏・魏氏と連合し、智伯を逆襲した。智伯は敗れて戦死した。これによって、この掘割は智伯渠と呼ばれてきた。最初、戦争のために掘られた智伯渠であったが、少なくとも漢代からその元の水路を利用して農業灌漑が始まった。『后漢書・安帝紀』によれば、「元初二年(115年)、三輔、河東、河内、上党、趙国、太原に勅令し、古い溝を修復し、水路を浚い、公と私人の畑を灌漑する。智伯渠を修復する水利工事は「乗高」と「防山」という作業であり、即ちダムを作って、水位を挙げて、高い所にも灌漑出来た¹¹⁾。

隋代と唐代には晋水がさらに智伯渠の水利が開発し、灌漑面積が拡大した。584年(隋代開皇四年)に、南河、中河、陸堡河、元の北河(智伯渠)を加えて、四つの水路が出来上がった。唐代では、639年(貞観一三年)とその後、長史李勣らが汾水を跨る水路橋を渡し、東城地区の生活用水を満たした。唐代には、この流域における灌漑面積が112頃までに拡大した¹²⁾。詩人李白が、「晋祠の流水が緑色の玉の如くである」という詩を残した。「晋祠の水」はその後一般に「晋水」と呼ばれた。

979年(宋太平興国四年)宋太宗趙光義が北漢を討伐した時、智伯をまねて晋水を晋陽に流し込んだ。その結果、晋陽及びその水利施設が大きな被害を受けた。宋代に入ると、社会が安定し、晋水の水利施設が修復され、農業生産が安定して、晋水流域の人口が増えた。その結果、「水争」が多発した。そのために地方政府が水の管理に強力に介入した。太原尉陳知白が晋水の水源地で分水施設を作って、晋水の水源を十等分に分け、水の南河に三割と北河に七割という配分の割合を定めた。さらに渠長、水甲制度を設けたので、水利管理も前より行き届いた。その時、「およそ数万畝を灌漑し、民が大きな利益を得た。」¹³⁾宋代以降、太原あたりは北方少数民族の交戦地域になった。后唐、后晋、后漢、北漢などの王朝が相次いで晋陽を都とした。そこで絶えず戦争で晋水の灌漑水路が大きな損害を被った。

明清時代に、晋水の水利施設が再び修復され、さらにその規模が拡大した。明代初期、汾河の東岸に平晋県城を築いた。その後平晋県城が洪水で被害を受け、再び汾河の西岸にある晋陽城の旧跡に太原県城を築いた。この県城の立地は清代にも踏襲された。明清時代には、地方政府が晋水の灌漑水路を完全に整備し、厳密な用水制度も設けた。その理由は「明代以降で渠の多数、造渠されるのは有力地主層による耕地拡大、或いは碾・磨設置によるものであるが、この時期ではすでに慣習法での使水は困難になり、新たな配水、管理が要求されてくるのである。ここに水争がおこり、官の調停をへて新しい規約が作成される。」¹⁴⁾

1729年(清・雍正七年)太原知県龔新が晋祠総河甲を任命して、晋水に関するすべての水利事務を晋祠総河甲に管理させた。その後晋水流域各水路及び各村の田畝面積を測量し、『河

冊』を制定し、晋水総河と四河の灌漑範囲をはっきり決めた。即ち総河：晋祠、赤橋、紙房；北河上河：西鎮、花塔、硬底、南城角、溝里、壑里、楊家北頭、泉民、古城營、羅城、金勝、董茹。北河下河：赤橋、硬底、小站營、五府營、馬圈屯。南河上河：索村、東院、棗園頭。南河下河：王郭、南張。中河：長巷、西堡、南大寺、三家、東庄、万花堡、東庄營。陸堡河：紙房、塔院、北大寺、東庄。また、新庄村は南河の末にあり、濠荒村と野場村は四河の排水の清水河の水ぎわにあるので、晋水灌漑組織に属さないが、灌漑できとされた。合わせて、晋水が36村を灌漑していた。

明清時代以来、晋水を利用して、晋水流域の伝統産業が遂に形成した。現代の研究調査によれば、晋水の温度は一年中も17.5℃、豊富なカリウム、明礬などの化学元素を含んで、さらに晋水流域の土壌は弱アルカリ性に加えて、肥沃な土地で、農耕に適し、農業の盛んな地域になった。晋水流域の農産物の中では最も広く知られるものは晋祠米である。米の形は真っ白で細長く、味は美味しい。清代には、天津の小站米と肩を並べる華北地域における米の珍品である。一時「貢米(皇室に献上する米)」とされた。『元和郡県志』によれば、「隋開皇六年、晋水を引き込んで稲田を灌漑し、溝の距離は四一里。晋祠米の栽培歴史は1400年以上である。清末には、「晋水の灌漑する稲田は甚だ広く、数千畝以上に達した」¹⁵。1936年には、晋祠米の栽培面積は合わせて4319畝、平均1畝の産量は125キ口、総産量は50万キ口以上である¹⁶。

晋祠米と同じように晋水の利を得て、よく知られるもう一つの農産物は大寺蓮根である。大寺村は北齊時代に建てられた崇福寺(大寺)に因んで名づけされ、南大寺と北大寺の二つの村より構成している。二つの村が晋祠に近く、中

河と陸堡河の水が利用できる。大寺蓮根は春の芒種の時に稲田に栽培し、間作を行っていた。「大寺のハスの花景色」は晋祠の有名な「外八景色」の一つである。大寺の蓮根は切ったらその蓮根の糸は1尺くらいに長く伸ばせる。「藕断絲連」(蓮根は切れても糸は繋がっている)と言われた。この蓮根を材料として作った冷菜(冷たいオードブル)は7、8日経ってもその味と色は変わらない。昔、祁県、太谷、平遥などの晋商の富裕者は祝祭日の時わざわざここに蓮根を買いに来た。大寺蓮根は張家口、内モンゴル、北京、天津などの遠い所へ売られた。

農産物以外に、晋水を利用して、「水磨」(水力で回す碾き臼)業と製紙業も盛んに行われた。晋水流域における水磨業は、少なくとも宋代から始まった。晋水の特徴は地形が西の方が高く、東の方は低いことである。水の流れは奔流のような勢いで、この水流の動力を利用して、碾き臼を動かし、大規模な食糧加工の「水磨」業は形成した。劉大鵬の『晋祠志』によれば、晋水流域は「水磨」が合わせて66基に登った。その中北河に13基、南河に10基、中河に28基、陸堡河に15基あった。「水磨」で加工した食糧は水で洗い、殻を取ったので、食糧の質がきれいでその香を保った。更に、明清以降、晋祠の周辺地域に商売が繁盛し、人口が増えて、食糧の需要量は大きくなるので水磨業は儲ける産業になった。「晋水の俗では、金持ちが水磨をいい財産とし、商売の人は水磨をいい産業とした」¹⁷。当時、大きな「水磨」は1日に製粉400~500斤に達し、晋水流域の「水磨」業は年間製粉250万斤以上に達した。1955年以降、国家の食糧の「統一購入、統一販売」政策及び水量の減少で、製粉量が急減した。その後電力製粉の導入で、水力製粉が完全に廃業した。

製紙業も、晋水流域の伝統産業の一つであ

る。製紙の原料は主に稲の藁と麦わらで、晋水流域はこの原料が確保できる。製紙工業には原料を浸し、蒸し、洗い、粉碎し、パルプにして、更にパルプを洗い、漉き、干し、成形などの手順を経て、大量の水を使う。晋水はこの用水量に満足できる。劉大鵬によれば、清代には、「村人が十分の一農作業に従事し、十分の九製紙に従事していた」。毎年、秋になると、紙を干す壁（晒紙墻）を作る¹⁸。

民国以降、製紙業が衰微し始めたが、伝統製紙業は一般農民にとって重要な収入の一つである。1935年の農村調査資料によれば、当時紙房村に製紙を営む家庭は21世帯で、村総世帯数の47.73%を占め、年間収入6720元である。赤橋村では、製紙を営む家庭は78世帯で、村総世帯数の61.4%を占め、年間収入は2万余元である¹⁹。1949年以降、赤橋村では、製紙業が集団化された。1950年、紙の集団販売が開始され、1952年に、草紙を売りさばく会社が設置された。1954年、赤橋初級合作社が設立し、製紙工場はすべて合作社に入社された。1956年に、新しい製紙技術が導入し、製紙の効率が高められた。1967年機械製紙工場ができ、伝統的製紙業は廃止された。

Ⅲ．人口・環境の変化と水資源の破壊

明清時代以降、晋水流域の自然と社会環境が激しく変わってきた。まず、人口が急速に増加

してきた。晋水流域のみのデータがないので、『太原県志』²⁰のデータをまとめて、このあたりに人口の移動について、次の表を作成した。

明清時代には、人口が絶えずに増大してきた、そのきっかけは、まず明代初期の軍屯と大規模の移民活動である。元末の戦禍で、北方地域の人口が激減した。明代の初期、太原は北方の「九辺」要所の一つで、朱元璋は三男を晋王に封じ、晋水流域は駐屯兵の農耕地域とした。古城營、五府營、小站營、東庄營、馬圈屯、河下屯、古寨、西寨、武家寨などの村は昔軍の駐屯所であり、晋水流域は今も「九營一八寨」という物語が伝わってきた。明代の衛軍の編成で、太原に一衛3000戸所、軍戸の数は大抵二万くらいで、太原県人口の三分の一を占めた²²。更に、明初の大移民で、山西省南部から北上した「洪洞大槐樹移民」の中から晋水流域に定住した人も多かった。現地調査によれば、晋水流域及びその周辺の王家庄、南堰村、呉家堡村、三家村、南峪(閻家峪)村、槐樹底村、圪塔村、高家堡村、大元村、田村などの村は元々大槐樹移民によって作った村落と言われている。晋水流域において、軍屯と大規模の移民活動、更に明清時代社会の長期安定を加えて、人口密度が高くなり、資源をめぐる争い、特に水をめぐる争いが多発した。人口の増加する一方、晋水の水量は、却って山間部における植生の破壊のために、減少してきた。研究者の計算によれば、宋代に、晋水の流量は1秒に2.5立方メートルだ

| 年代 | 人口 | 年代 | 人口 |
|--------|-------------------------|--------|------------|
| 明・洪武時期 | 53719 (人) | 清・康熙時期 | 31735 (丁) |
| 明・永楽時期 | 50228 (人) | 清・雍正時期 | 34762 (丁) |
| 明・成化時期 | 51652 (人) | 清・乾隆時期 | 213434 (人) |
| 明・嘉靖時期 | 79068 (人) | 清・嘉慶時期 | 220928 (人) |
| 明・天啓時期 | 81200 (人) ²¹ | 清・道光時期 | 224253 (人) |
| 清・順治時期 | 27339 (丁) | | |

が、明代には1秒に1.4立方メートルに減少した²³。1650年（明代崇禎二二年）に、善利泉が一時涸れた。1723年（清代雍正元年）に、魚沼泉も一時水出なかった。

人口の急増に伴い、晋水の水源地としての西山などの山間地帯をも開発し始まった。まず、山林を伐採した。昔、西山が緑の山林が覆われ、山間に猛獣がよく出没し、多くの鳥類が生息していたが、清末になると、山間に「樹木は甚だ少なくなった²⁴。野生動物の跡が絶たれた²⁵。山間植生の破壊の結果、山の雨水をしみ込む機能が失われ、降雨の時、山津波の被害が頻発した。山間部はかつて峪水（谷川）が緩やかに流れて、灌漑ができだが、明清時代以降、「峪水為災」（谷川が水害になった）、大雨の時、山崩れや土石流が発生した。そのために各谷の出口に石の堤防を築いた。しかし、谷川の水は泥と砂をかなり含んで、泥と砂が堆積したので、その堤防はよく崩された。洪水が晋水流域を流れ込んで、その運んできた泥と砂が晋水の水路を埋め、水利施設を破壊した。清代では、この土石流の災害は「農事にひどい災害齎し、長い間繰り返し、解決方法がなかった²⁶。同治一三年、馬房峪で洪水が出て、多くの死者がでた。西堡村が一人しか残されなかった、他の人は全部溺死した。光緒三年の洪水で、この村は完全に消え失せた²⁷。民国以降、洪水と土石流の被害で、晋水流域の村落の数と耕地面積が少なくなった。民国時代になって、晋水で灌漑できる村は31、灌漑面積は260頃16畝で、清代の1729年（雍正七年）と比べると、灌漑できる村が四つ（西堡村、野場、東庄營、馬圈屯）減少し、灌漑面積が6頃48畝減少した。更に汾河が氾濫して、晋水流域の灌漑施設も破壊された²⁸。

晋水流域における人口の増加に伴い、平野を開発するだけでなく、西側の山間部における

地下資源を開発し始まった。西部の山脈に石炭、明礬、鉄、硫黄などの鉱物がある。清代からこれらの鉱物に対する開発が盛んに行われた。乾隆と嘉慶時期、外来人口が急増し、その人口の大半は山間部に入って、鉱業に従事した。清末と民国初期には、政府が鉱業の開発を奨励し、各地の商人、甚だしきに至っては江蘇と浙江の商人が大金をもって来て鉱業に投資した。「新政を敷いて、鉱業は更に興された²⁹。1920年に劉大鵬がまとめた『明仙峪志』と『柳子峪志』によれば、この時期、山間部には炭鉱と明礬は広く分布していて、いたるところに見られた。明仙峪には30箇所以上で、柳子峪には100箇所くらいである³⁰。更に、在来の方式で採掘したので、落盤、火災及び浸水などが多発し、炭鉱は大量開削されて大量廃止され、もともと緑の山は見渡す限り廃止された炭鉱の遺跡を被っている。

鉱業の開発はまず地上の環境に影響を齎した。炭鉱の掘り開くのは、木材が必要で、山間部の樹木が伐採された。従業員の生活のために、山の中に勝手に井戸を掘り、薪を切った。炭鉱と比べて、明礬を採掘し、加工した時、水と薪の使用量はさらに多かった。露天採掘し、露天加工したので、廃水はそのまま流された。植生が殆んど破壊された。また、炭鉱の採掘により、地下水の水脈にも大きな影響を齎した。

一方、解放前には、在来の方式で採掘したので、炭鉱の規模、特に坑道はそんなに深くなかった。環境への破壊は地上の植生が主となした。しかし、建国以降には、機械で採掘し、炭鉱の規模が拡大し、坑道も深くなった。これによって、地下水への破壊が主となした。

1958年の人民公社時期、風峪8村が集団所有制の炭鉱を開業し、在来の方式で採掘したが、その規模が昔より拡大した。1960年代から、機

械で採掘が始められた。1980年代には、太原市の最大の炭鉱会社西山煤鉱集団公司所属する官地鉱と白家庄鉱が西山地域で大型の炭鉱の操業が開始した。その結果で一部の村落は地面が沈下し、裂け目ができた。その他、地元の郷鎮政府は多くの炭鉱の採掘を許可した。風峪地方政府が20社の炭鉱の採掘を許可した。個人が勝手に採掘した炭鉱が更に多かった。この時、炭鉱以外に、採石場と石膏鉱も操業を開始した。店頭村の範囲内のみには、採石場20で、石膏鉱は6つあった。

1960年、晋水水源の近くの所で太原窒素肥料工場が生産を開始した。この工場は大量の水を使用したので、晋水の灌漑用水は大半削減された。その年、この流域の食糧生産は45.5万キロ減少した。1962年、この窒素肥料工場は明仙峪、蘭居寺、難老泉のあたりで7つの機井(モーターでくみ上げる深い井戸)が掘られた。これによって、晋水の水源の出水量は大幅に減少した。1972年、晋祠三泉の中の魚沼、善利の二つの泉水が涸れた。1970年代以降、清徐、梁泉と洞児溝の所で3つの自噴井戸が使用開始して、晋水の水源の出水量が更に少なくなった。

建国以降、晋水の流量は、1954～1958年間、平均1秒に1.95立方メートル、1962～1970年間平均1秒に1.65立方メートル、1971～1980年間平均1秒に1.131立方メートル、1981～1985年間平均1秒に0.65立方メートルになった³¹。1970年代以降、晋水の水量が減少するため、農業用水が不足した、それで多数の井戸を掘られた。1977年に晋水流域内で35の井戸を掘り、1976～1985の間に、合わせて86の井戸が掘られた³²。1986年1月、太原水利局と晋水辦公室が共同で『晋水水源の保護に関する報告』を提出し、井戸を掘らないと建議した。太原市政府がこの報告を各部署に伝達した。水源地に新たに井戸

を掘らなく、一部の井戸を閉鎖すると決めたが、実に地下水の汲み上げる量は拡大し続いた。1993年、流域内の井戸は毎年の汲み上げた水量2648万立方メートル、その中、都市と工業用水は1755万立方メートル、農業用水1893万立方メートルである³³。1994年4月30日には、難老泉もついに完全に涸れた。その後、泉水出口の所の地下水の水位が下がりつつあり、2003年の測量によって、その水位は地面下18.3メートルまでに下がった。晋祠の建物の地盤が沈下し、聖母殿が30センチメートル沈下した³⁴。その後、観光のために、晋祠の中の難老泉の水はモーターでくみ上げる循環水になった。

晋水が涸れたので、伝統的な農産物米、蓮根の栽培が絶え、製紙、製粉業は全部廃業した。2004年に、赤橋村の経済収入の構成は次の通りである。運輸業40%、服装加工業30%、農業10%、観光業10%、養殖業2%、その他8%である³⁵。水と関連する産業は殆ど消えた。

しかし、水が無くなっても、近年では水と関連する遺跡を観光資源として開発された。観光業は新たな産業として興られた。これは晋水が人間に提供できる最後の恵みであるだろう。

まず、晋祠の世界遺産へ推薦することであった。2001年9月、太原市政府が晋祠を世界文化遺産に推薦活動を開始すると宣言した。国家文物局や清華大学の専門家を招いて、推薦計画を検討した。清華大学に依頼して、『晋祠保護計画』を作成した。その結果は、晋祠が2001年から、中国政府の世界文化遺産推薦候補として登録した。しかし、その後、晋祠の特有の文化価値はなにかという課題をなかなか明確に論証できなく、さらに晋祠周辺の環境が深刻に破壊されたので、2006年から、晋祠が中国政府の世界文化遺産推薦候補リストから削除されてしまった。

一方、郷・村レベルでも観光資源が開発され、観光名所の再建がずっと継続的に行われた。1993年、晋祠村村民委員会が主催する河会というイベントが復活された。河会は晋祠の水母を祭祀する儀式である。現代中国の建国以降、このような活動は「迷信活動」として禁止された。現在、「文化搭台、経済唱戲」（文化活動が舞台を提供し、経済活動を中心として行う）という名義で復活した。旧暦の6月15日から三日間伝統劇を上演した。一回目は晋祠内の水鏡台で上演し、その以外は晋祠の外で臨時舞台を建て、上演した。その他、晋祠内の献殿で聖母を祭祀する儀式を行い、村の広場で獅子踊り、龍灯籠踊りなどの民間芸も行った。その間に「商品交易会」も開催した。この河会は初めに村民委員会により主催したが、その後、民間企業家がイベントの計画と実施の中心人物になった。

赤橋村では、四清運動と文化大革命の時に打ち壊された水利・宗教名所を再建した。晋陽城から晋祠への「古官道」、豫讓橋、豫讓祠、智伯渠、興化洞、蘭若寺、明清古邸宅などが一部修復し、再建し、一部計画保護している。村の幹部によれば、現在、中国南方のある民間会社と商談し、赤橋村の全体をテーマパークとして開発する予定だが、一部の村民が反対するので、このプロジェクトは現在中止する状態に落ち込んでいる。

IV. 「水」をめぐる宗教信仰の創生と変化

歴史上、晋水流域における信仰のシンボルとしての晋祠で祀られた「主神」は3回変わった。この「主神」の変遷はすべて水資源の漸次不足と「水争」の多発と関わっていた。

晋祠で初めに祀られた神は周代の唐叔虞であ

り、その時、唐叔虞祠と呼ばれた。この建物に関する最初の記録は、酈道元の『水経注』のなかにあった。「昔智伯が晋水で晋陽を流し込んだ。その後、水路の上流で水を加えて沼になった。沼の西側、山の麓に唐叔虞祠があった」。虞は周の武王の弟で、その領地は黄河と汾河の西側にある唐と呼ばれる所であり、虞の子は燮で、晋侯に封じた。唐王朝を建てる李淵は晋陽で兵を挙げた、その時に晋祠堂で唐叔虞の像の前に恵みを祈った。李淵が晋陽で興ったので、その国号を唐と称した。唐代には、晋陽が王朝の発祥の地として、北都・北京を置いた。唐代の晋陽は長安、洛陽につぎ、3番名の大都市になった。唐太宗李世民が晋祠に行き、唐叔虞を祭祀し、石碑を立て、樹木を栽培した。唐代には晋祠が隆盛を極めた。しかし、その後の戦争で、晋祠は繰り返して破壊され、再建された。だが、その規模は唐代に及ばない。特に、元代の末、唐叔虞祠の方位は東向け（即ち「際山枕水：山の麓にあり水源の真上にある」、現在聖母殿の場所）より、南向けに変えた。宋代までに、晋祠の主な祠堂は唐叔虞祠であった。唐叔虞は国家により祭祀した神様で、晋国及びその後山西・太原地域の見守り神であった。

しかし、宋代から、聖母は晋祠の主神になった。聖母殿はもと唐叔虞祠の場所、即ち晋祠の中心地で立てられた。その規模は唐叔虞祠よりずいぶん大きく、晋祠の正殿にされた。聖母については、初めに唐叔虞の母の邑姜として祭祀されたが、その後「聖母」を「水神」と誤認され、実は「水神」として盛んに祭祀されるようになった。北宋熙寧年間（1068～1077年）「昭濟聖母」と称され、その後歴代王朝が聖母殿を再建し、聖母を号に封ぜられる。北宋崇寧年間、勅令で再建され、元代至正二年（1342年）改修され、明代洪武初頭、また「広惠顯靈昭濟聖母」

の号に封ぜられ、洪武四年（1371年）に「晋源之神」と改めに封ぜられ、天順五年（1461年）に改修され、万歴壬午年（1528年）すっかり新しく改修され、清代の同治、道光帝からも号に封ぜられ、西太后から額を賜った。それに対して、唐叔虞祠はずっと配殿になった。清代初頭、朱彝尊が『遊晋祠記』の中にこのように述べた。「聖母廟は何時から分らないが、地元の人が旱魃に遇って、祈りを捧げると叶う。その故廟が高く雄大なる。しかし、唐叔虞祠が却って傍らに位置した」³⁶。

宋代以降、「聖母」は「水神」として主に祭祀された理由は、晋水流域における水資源問題の際立つことと繋がっていた。宋代には、全国を統一し、晋水流域が戦乱を経て、人口が増加してきた。水に関する需要が急増し、水資源はかなり重要視された。劉大鵬が、歴代に「聖母」を号に封ぜられる理由は「すべて雨乞いをする」ということからである³⁷。一方、宋代には、水をめぐる紛争が多発した。そのために、太原尉陳知白が晋水の水源地で分水施設を作って、「三七分水」という配分制度を定めた。さらに渠長・水甲制度を設けた。民間における「水争」が激しくなった。官民ともに水に対する関心度が高まり、「水神」信仰が深められた。

明清時代から、晋水流域には、人口が絶えずに急増し、水をめぐるトラブルが頻発した。この時、政府より民間が日常水利管理の主役を務めることになった。この状況に相応し、晋水流域には新たな「神様」が現れた。つまり「水母」である。唐叔虞・聖母と異なって、「水母」（あるいは「水母娘娘」）は完全に民間で作った神である。晋祠内にある水母楼は難老泉の上にあつて、通俗的な名称は梳洗（身仕舞いをする）楼と呼ばれた。『晋祠志』によれば、1563年（嘉靖四二年）に建てられた。誰が建てたか詳しく

記述されなかった。しかし、水母楼の中の馨と香炉は嘉靖一一、一三に年製造された。これらは他の廟から移してきたものと推測できる。その水母像は水がめの上に坐って、農村の若妻の装いをし、薄化粧をして赤らめた頬で、黒髪の半分が垂れ下がって、髪の上に櫛がひっかけて、化粧の途中様子を見えた。1844年（道光二十四年）再建した建物は二階だが、1階では三つの石洞穴があった。これは農家の建物とかなり似ている。神像や建物から見れば、水母が政府当局による認められた神ではないと推断できる。水母は民間伝説によって作られた神である。この伝説は最初『邑志』で記載した。「通俗的な伝説によれば、晋祠の聖母（水母 筆者）が柳という姓を名乗り、金勝村人である。姑が厳しく、（毎日）水を汲むことはきつい。（ある日水を担ぐ時）道で白い服を着て、馬に乗る人に出会って、馬に水を飲ませるため水が欲しいと言われて、柳さんが水を与える。馬に乗る人は鞭を柳さんに与え、そしてこの鞭を水がめの下に置いて、鞭を鳴らすと水が出ると言った。柳さんが家に戻って、姑が誤って鞭を鳴らすと、大量の水が出た。急いで柳さん呼んで来て、水がめの上に座らせて、水が止まった。聖母（水母 筆者）の座は水がめの口であると言い伝えられている。」³⁸ 明代太原知府高汝行は「水がめに座るとい説は、田舎の人、老婦人や女子などの口から伝わった。士人、君子や事理に通じている人から言うはずではない」といった³⁹。劉大鵬もこの物語りは「荒唐無稽であり、信じられない」と指摘した⁴⁰。

実は、「水母娘娘」の伝説は、晋水流域における水不足と水争いの深刻化を反映している。聖母（水母）柳氏の出身地金勝村（別名大仏寺村）は晋水北河の末端に位置している。上流の花塔村、古城营村の間によく「水争」が起こっ

た。明代万暦年間、金勝村の柳桐鳳が北河の夜間の水は王府が使用されて、金勝村まで灌漑出来なくなるので、役所に「晋祠聖母柳氏の実家金勝村の回馬水」として水を要求したが、却下された⁴¹。1739年（清代乾隆四年）金勝村・董茹村と花塔村の間に水をめぐって訴訟を起こし、役所の判決で、金勝村・董茹村は三割の春水を獲得した⁴²。金勝村が下流に位置するので、繰り返して「水母娘娘」の伝説を強調してきた。現代でも「水母娘娘」の祭祀式典を挙げる時、金勝村の人が到着しなければ、式典が開始できないという習慣が留保している。

水母祭祀の活動では、毎年旧暦の6月1日から7月5日まで行われた。その中、6月15日に各村は演劇が上演された。一般の村での演劇は1日しか行わなかったため、幾つの村が共同で演劇を実施した。しかし、晋水の総河に位置する晋祠、紙房、赤橋三村では三日間演劇を上演した。これは実に三村の「総河」の地位を強調する意味が表われている。総河三村が水源に近寄り、随時に灌漑することができ、水路工事も人力と食糧を納める義務がないなどの特権をもっていた。下流の村は繰り返して総河三村特権の取り消しを要求したが、総河三村に拒否された。水母を祭祀する儀式において、各渠の渠長が「ゲスト」とし、総河渠長が「主人」として進行する立場の区別があった⁴³。このような儀礼を通じて、総河三村がその特権の保つのを図った。

その他、花塔村は毎年清明節の時、「張郎」を祭祀してきた。昔、晋水の南河と北河の間によく「水争」が起こった。時々、凶器を持って集団で争闘し、死者が出た。県知事は、水の配分は「撈油銭」によって決めると提案した。両河の代表が集って、大きな油鍋（加熱して、鍋の中の油を沸騰する）の中に10枚の銅銭を入れ

る。双方は一人の代表を指定し、その二人は油鍋の中から奪い合って銅銭を探り取る。分水の割合は双方がそれぞれ取った銅銭の枚数によって決めた。沸騰する油を見ると、他の人は臆病となり、互いに顔を見合わせて、動かなかった。この時、北河の人の群れの中から「張」姓の青年が挺身して、沸騰する油の中から銅銭を探り取った。7枚の銅銭を取った。しかしこの青年は火傷で亡くなった。これによって、県知事が北河側に七割の水を配分と判決した。この「張」姓の青年は花塔村の人間で、その後「張郎」と呼ばれた。村民に永らく懐かしく思われ、尊敬されて手厚く埋葬され、「張郎塔」が建てられた。花塔村は毎年清明節の時、祭壇を設けて「張郎」を祭祀した。この伝説によって、北河の都渠長はずっと花塔村の張姓の人間が世襲してきた。

さらに、北河の19村が、旧暦6月8、9と13日に、水母祭祀の儀式を行って、三日間演劇を上演した。この儀式において、演劇の外題や各村からの集金などがすべて花塔村の都渠長の張姓の人によって決められた。実は花塔村は北河の要所にあり、下流にある村の用水がすべて花塔村を通し、水管理に対して絶大な影響力をもっている。これによって北河流域において、毎年水路工事の組織及び工事集金などは花塔村によって決められた。旧暦3月1日、灌漑初めの日には、北河の各渠甲が花塔村に集って、晋水の水神を祭祀した⁴⁴。北河祭典において、花塔村の主人的な地位は実にその地理的或いは水管理に関する地位を反映していた。

V. おわりに

晋水流域の2500年の歴史は、水の開発と人口増加及び環境破壊という悪循環の過程であると

言っても過言ではない。このような水、人間、環境の三者が互いに影響し合って、人間社会の産業構造、社会結合及び宗教信仰も次第に変化してきた。晋水流域における人間の生産・精神活動はすべて水をめぐって展開してきたのである。

今までの水利史研究は殆ど人間より大自然から水資源を取り出した歴史を中心として行われたが、過度の開発によって引き起こされた水資源に対する破壊については、十分に検討されてきたとは言いがたい。さらに本稿で指摘したように、水資源の開発・管理及びその慣行が、人間社会の在り方と緊密に関わった一方、水資源に対する過度の開発も人間社会の生産、社会組織及びその精神活動にも関わっていた。

晋水地域が所属する華北地方の人々が、水の不足を中心とする厳しい自然環境の下で営々と暮らし続けてきたという事実の重みを含みながら、一方で河川の増水による氾濫という全く逆の現象にも同時並行的に対応しなければならなかったという歴史的事実から、水が不足するにせよ、また反対に余りすぎるにせよ、これからの水に関する研究は、「水利」という枠を超えて、自然環境としての水と、社会制度や産業、宗教信仰などの社会的要因と結合した社会環境としての水の影響を総合的に考察しなければならない。

本稿はそのような課題を遂行するための前提的作業の一つである。

注

- 1 湯浅起男『文明の中の水 人類最大の資源をめぐる一万年史』新評論、2004年、p.32。
- 2 王志剛・張偉兵「從『史記・河渠書』說到当代中国水利史的編纂」『史学史研究』2009年第1期。
- 3 鄭肇経『中国水利史』商務印書館、1939年。
- 4 代表的業績は次の通りである。武漢水利電力学院・水利水電科学研究院『中国水利史稿』水利電力

- 出版社、1979年。姚漢源『中国水利史綱要』水利電力出版社、1987年。
- 5 2004年8月山西大学中国社会史センターは「第一回地域社会史比較研究討論会」を主催した。また、同センターは2010年8月「第一回中国水利社会史国際シンポジウム」を主催した。この二回の会議の論文集は公刊した。行龍・楊念群主編『区域社会史比較研究』社会科学文献出版社、2006年。山西大学社会史中心編『山西水利社会史』（『社会史研究』之二）北京大学出版社、2012年。
 - 6 岡崎文夫、池田静夫『江南文化開発史』弘文堂、1940年。池田静夫『支那水利地理史研究』生活社、1940年。
 - 7 豊島静英「中国西北部の水利共同体について」『歴史学研究』第201号、1956年11月。
 - 8 石田浩『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房、1986年、参照。
 - 9 小野泰「中国水利史研究会四十年の歩み」『中国水利史研究』第37号、2008年、参照。
 - 10 森田明『山陝の民衆と水の暮らし その歴史と民俗』汲古選書、2009年。井黒忍『分水と支配 金・モンゴル時代華北の水利と農業』早稲田大学出版部、2013年。
 - 11 趙本義「智伯渠考 - 兼談古晋陽城供水問題」『山西水利』1988年第1期。
 - 12 趙本義「古代晋水的利用」、『山西水利』第2期、1988年。
 - 13 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』上冊、山西人民出版社、1986年、p.478。
 - 14 好並隆司「近世・山西の水争をめぐって 晋水・泉東兩渠の場合」中国水利史研究会編『佐藤博士退官記念 中国水利史論叢』国書刊行会、1984年、p.366。
 - 15 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』上冊、山西人民出版社、1986年、p.125。
 - 16 太原市南郊区地方志編纂委員會編『太原市南郊区志』三聯書店、1994年、p.196。
 - 17 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』上冊、山西人民出版社、1986年、p.138。
 - 18 劉大鵬遺著、喬志強標注『退想齋日記』（光緒二十一年九月二四日）山西人民出版社、1990年 p.46~47。
 - 19 劉容亨「蘭村、紙房、赤橋三村之草紙調査」『新農村』第三、四期合冊、1935年。
 - 20 道光六年（1826）『太原県志』巻二、『城垣』。
 - 21 清朝には、人口統計の単位は前期と後期と違った。「丁」は16~60歳の「成丁」を指し、一般的に、「丁」と人口の比例は1:5。参照：行龍『人口問題与近代社会』人民出版社、1992年、第一章「人口数量的演变」。
 - 22 袁漢城「九営一八寨与明軍屯考」『晋陽文史資料』第6輯、2002年9月。
 - 23 王鴻玲「晋祠泉水的形成、利用和保護」『山西水利』第2期、1987年。

- 24 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』上冊、山西人民出版社、1986年、p.1137。
- 25 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』上冊、山西人民出版社、1986年、p.1406。
- 26 劉大鵬『晋水志』卷二、p.10。公刊なし、山西大学社会史センター所蔵。
- 27 劉大鵬『晋水志』卷三、p.12。
- 28 『晋祠水利志』山西人民出版社、2002年 p.18～19。
- 29 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』下冊、山西人民出版社、1986年、p.1243。
- 30 劉大鵬著、慕湘・呂文幸点校『晋祠志』中冊、『明仙峪志』、『柳子峪志』。
- 31 王鴻玲「晋祠泉水の形成、利用と保護」『山西水利』第2期、1987年。
- 32 李紅武『晋水記憶 一個水利社区建設の歴史与当下』中国社会出版社、2011年、p.119。
- 33 張荷編著『晋水春秋 山西水利史述略』中国水利水电出版社、2009年、p.162～163。
- 34 張荷編著『晋水春秋 山西水利史述略』中国水利水电出版社、2009年、p.163。
- 35 趙繼明「『道』、『渠』 捍閩話赤橋」政協晋源区委員会、太原晋祠博物館編『古村赤橋』山西出版社、2005年、p.22。
- 36 道光『太原県志』卷一三、「芸文二」。
- 37 劉大鵬『晋祠志』卷八、『祭賽下』、p.194。
- 38 劉大鵬『晋祠志』卷四二、『雜編』、p.1058。
- 39 劉大鵬『晋祠志』卷四二、『雜編』、p.1058。
- 40 劉大鵬『晋祠志』卷四二、『雜編』、p.1058。
- 41 『水利禁例移文碑』碑、劉大鵬『晋祠志』卷三〇、『河例一』、p.800。
- 42 『晋祠北河水利碑』碑文、劉大鵬『晋祠志』卷三三、『河例四』、p.862～866。
- 43 劉大鵬『晋祠志』卷八、『祭賽下』、p.191。
- 44 劉大鵬『晋祠志』卷三四、『河例五』、p.873。